

# 方向

第一六五号 一九九四年六月一日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

ウドウンバラの花が 法華経巡礼 九二一 1994.05.19 原田憲雄

07-31. さて、比丘たちよ、かれら大梵天たちは、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚ったかたを、ふさわしい偈で、まのあたりに讃嘆したのち、世尊にこのように言った「世尊は教えの輪を廻してください。世尊は涅槃をお説きください。世尊は衆生をお救いください。世尊はこの世間に利益を与えてください。世尊は法をお説きください。悪魔や梵天と共なる世間のため、沙門と婆羅門と共なる、天神や人間やアスラと共なる命あるものたちのために。それは多くの人々の幸福、安樂のためになり、世間を慈しむかたの、天神や人間たちの利益と幸福と安樂のためのわざとなるでしょう」

atha khalu bhikkvas te mahā-brahmāṇas taṃ bhagavantam mahābhijñānābhivhuvaṃ tathāgatam arhantam samyak-sambuddham samrukham ābhiḥ sārūpyābhir gāthābhir abhistutya taṃ bhagavantam etad ūcuh / pravartayatu bhagavān dharma-cakram pravartayatu sugato dharma-cakram loke desayatu bhagavān nirvṛtim tārayatu bhagavān sattvān anugrṇātu bhagavān imāṃ lokam desayatu bhagavān dharmam asya saderakasya (W. ) lokasya samārakasya sabrahamakasya sa-sramana-brāhmaṇikāyāḥ prajāyāḥ sa-deva-mānusaśurāyāḥ / tad bhavisyati bahu-jana-hitāya bahu-jana-sukhāya lokānukamp-

āyai mahato jana-kāyasvārtāya hitāya sukhāya devānāṃ ca manusyaṅgāṃ ca ॥

07-32. そのとき、比丘たちよ、かれら五十千万億の梵天たちは、ともに声を揃えて合唱し、あの世尊にふさわしい偈でこう語りかけた。

atha khalu dhikṣavas tāni pañcāśad-brahma-kotīi-nayuta-śata-sahasraṅgy eka-svareṇa sama-saṃgītyā tam bhagavantam ābhyaṃ sārūpyābhyaṃ gāthābhyaṃ adhyahāṣanta ॥

07-33. 廻してください、最勝の教えの輪を、偉大なムニよ、法をお説きください、十方において。

お救いください、苦悩に迫られた衆生たちを、歓喜に震えさせてください、体もつ者たちを。(三五)  
聞けば菩提を得るものとなり、天上の領域にゆくこともできましよう。

アスラの身体を捨て、一切は、静かで、やさしく、幸福なものとなるでしょう。(三六)

pravartaya (W: pravartayā) cakra-varaṃ mahā-mune prakāśaya (W: prakāśayā) dharmu dāśa-diśāsu /  
tārehi sattvān dukha-dharma-pīditān prāmodya-harsaṃ janayasva dehinām ॥35॥

yam śrutva bodhīya bhavyeṃ lābhino divyāni sthānāni vrajeyu cāpi /

hāveyu ca (W: ca) āsura-kāya sarve śāntās ca dāntās ca sukhī bhavyeṣu ॥36॥

07-34. そのとき、比丘たちよ、その世尊は、かれら大梵天たちの願いをも、沈黙によってお受けになった。

atha khalu dhikṣavaḥ sa bhagavāns tesāṃ api mahā-brahmaṅgāṃ tūṣṇī-bhāveṇādhivāsayati sma ॥

07-35. さてまた、比丘たちよ、そのとき南の方向のあの五十千万億の世界で、梵天の神車が、非常に光を放ち、

熱し、輝き、映え、きらめいた。そのとき、比丘たちよ、大梵天たちはこう考えた。「これら梵天の神車が、非常に光を放ち、熱し、輝き、映え、きらめいているが、これはどのようなことの前兆であろうか」と。そこで、比丘たちよ、これら五十千万億の世界で、かれら大梵天たちはすべて、たがいに宮殿を訪ねて、報告しあつた。

tēna khalu punar bhikṣavaḥ samayena daksinaśyāṃ diśi tesu pañcāśatsu loka-dhātu-kotī-nayuta-śa-  
ta-sahasresu yāni brāhmaṇi vimānāni tāny atīva bhrajaṅtī tapanti virajāntī śrīmantī ojasvini  
ca / atha khalu bhikṣavas tesāṃ mahā-brahmaṇām etad abhavat / imāni khalu punar brāhmaṇi vimā-  
nāny atīva bhrajaṅtī tapanti virajāntī śrīmantī ojasvini ca / kasya khalv idam evaṃ-rūpam pur-  
va-nimittam bhaviṣyati / atha khalu bhikṣavas tesu pañcāśatsu loka-dhātu-kotī-nayuta-śata-sa-  
hasresu ye mahā-brahmaṇas te sarve 'nyonya-bhavanāni gatv 'ārocayāmasuḥ /

07-36. そのとき、比丘たちよ、妙法という名の大梵天が、この梵天の大集団に対して偈で話しかけた。

atha khalu bhikṣavaḥ sudharmo nāma mahā-brahmā tam mahāntam brahma-gaṇam gāthābhīyam adhyabhas-  
ata ॥

07-37. 理由がないのでも原因がないのでもない、いま、友よ、すべての神車がここで激しく輝くのは。

きつと何かの前兆を示すのだ、この世間では。さあ求めよう、そのわけを。(三七)

まったく、過去の十カルパの間には、一度だって現れたことがない、このような前兆が。

それは天子がこの世間にうまれたのか、あるいは仏が出現されたのか。(三八)

nāhetu nākarāṇam adya māsāḥ sarve vimānā iha jāvalanti /

nimittam (W:nimitta) darsenti ha kim pi loke sādhu (W:sadhū) gavesāma tam etam artham //37//

anūna kalpāna śata hy atitā naitādrāṇam jātu nimittam āsit /

yadi vopapanno iha deva-putro utpannu loke yadi vaha buddhah //38//

07-38. さて、比丘たちよ、これら五十千万億の世界にいるかれら大梵天たちも、すべてみな、連れだって、それに梵天の神車に乗り、スメールの山のようにうずだかい花うてなをもって、四方を巡歴し、北の方に向かって行進した。そして、比丘たちよ、大梵天たちは北の方で見た、あの世尊・大通智勝如来・尊敬されるべき・正しく覚ったかたが、最勝の菩提道場にいたり、菩提樹の下の獅子座につき、諸天、龍、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アスラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガ、人間と人間ならぬものに取り巻かれ、尊敬されているのを、また息子の十六人の王子が教えの輪を廻されるようお願いしているのを。見たかれらは、その世尊に近づき、近づいて世尊の両足を頭にいただいて拝礼し、世尊を幾百千回も右廻りに廻ったのち、スメール山のようにうずだかい花うてなを世尊の上に撒き散らし、高さ十ヨージュナのあの菩提樹にも撒き散らした。撒き終ってかれらは梵天の神車をあの世尊に奉獻した「世尊は我々をいつくしんでこの梵天の神車をお受けください、スガタは我々をいつくしんでこの梵天の神車をお使ってください」と。

atha khalu bhikkavaḥ tesu pañcāśatsu loka-dhātu-koti-nayuta-śata-sahasresu ye mahā-brahmaṇas

te sarve sahitāḥ samagrās tāni divyāni svāni svāni brāhmāṇi vimānāny abhiruhyā divyāṃś ca sum-  
 eru-mātrān puṣpa-putrān grhītvā catasru dikṣv anucāṅkramanto 'nivicaranta uttaram dig-bhāgam  
 prakrāntāḥ / adrāksuḥ khalu punar bhikṣavas te mahā-brahmāṇa uttare dig-bhāge tam bhagavantam  
 mahābhijñānābhivṛvāp tathāgatam arhantam sanyak-sambuddham bodhi-maṇḍa-varāgra-gaṭam bodhi  
 -vrkṣa-mūle simh-āsanopaviṣtam parivrtam puras-kṛtam deva-nāga-yakṣa-gandharvāsura-garuḍa-kiṃ-  
 nara-mahoraga-manuṣyamānuṣyais taiś ca putraiḥ ṣoḍaśabhi rāja-kumārair adhyeṣyamānaṃ dharma-  
 cakra-pravartanatāyai / drṣtvā ca punar yena sa bhagavāṃś tenopasaṅkrāntā upasaṅkrāmya tasya  
 bhagavataḥ pādau śirobhir vanditvā tam bhagavantam aneka-śata-sahasra-kṛtvāḥ pradakṣiṇī-kṛtya  
 taiḥ sumeru-mātraiḥ puṣpa-putrais tam bhagavantam abhyavakiranti smābhiprakiranti sma tam ca  
 bodhi-vrkṣam daśa-yojana-pramāṇam/ abhyavakīrya tāni brāhmāṇi divyāni vimānāni tasya bhagavato  
 niryāṭayāmāsuḥ / pariḥṛṇātu bhagavān imāni brāhmāṇi vimānāny asmākam anukampām upādāya / par-  
 ibhūñjatu sugata imāni brāhmāṇi vimānāny asmākam anukampām upādāya //

07-39. そうして、比丘たちよ、かれら大梵天たちは、それらおののの神車を世尊に奉獻し、そしておのれおのれしい偈によつて、その世尊をおののあたりに讚美した。

atha khalu bhikṣavas te 'pi mahā-brahmāṇas tāni svāni svāni brāhmāṇi vimānāni tasya bhagavato niryāṭya  
 tasyāṃ velāyāṃ tam bhagavantam samṃukham ābhiḥ sārūpyābhir gātābhir abhiṣtuvanti sma //

07-40. 得難いことです、導師にお会いできるのは。ようこそ、生存への渴望を打ち砕くかたよ。

久しぶりに今あなたは世間に出現された。幾百カルパも経た後にやっとお目にかかるのです。(三九)  
衆生の渴望を癒してください、世を救うかた、見たこともないあなたにお会いするのです。

ウドゥンバラの花のように得難いあなたに、やっとわたしたちはお会いできたのです、導師よ。(四〇)  
わたしたちのこれらの神車はいま、導師よ、あなたの威光によって、飾られました。

これをお受けください、あまねく見通すかた、お使いください、わたしたちに恵むために。(四一)

*sudurlabham darśana nāyakanam svabhyaśatam te bhāva-rāga-mardana /*

*sucirasya te darśanam adya loke paripūrṇa-kalpāna śatebhi drśyase ||39||*

*trsitām prajām tarpaya loka-nātha adṛṣṭa pūrvō 'si katham-ci drśyase /*

*audumbaram puṣpa yathaiiva durlabham tathaiiva drṣṭō 'si katham-ci nāyaka ||40||*

*vimāna asmākam imā viniyaka tavānubhāvena bisobhitādyā /*

*parigrhya etiāni samanta-cakṣuḥ paribhūjya cāsmākam anugrahārtham ||41||*

ウドゥンバラは、「優曇鉢」「優曇婆羅」などと音写し、その木を優曇婆羅樹、その花を優曇華(うどんげ)

の花などといい、桑科のうちの無花果の一種で、学名 *Ficus Glomerata* がそれだという。しかし伝説上の植物で、三千年に一度だけ花が咲くとか、如来が出現されるか転輪聖王が生れたときに花が咲くといわれ、經典のなかでは希有な事の譬えとされる。クサカゲロウの卵も優曇華というが、これはまったく別のものである。

## 『広布山妙徳寺年表』序

I この年表は、一九九二年、本院院日暁上人第五〇回忌報恩事業の一つとして刊行した広布山叢書第一編『広布山妙徳寺三百年史』を編集する準備に作成し、発行後、さらに修補拡充して独立の年表としたものである。年表の基礎としたのは、『妙徳寺過去帳』（略号㉔）、『万人講過去帳』（略号㉕）、『大内寺過去帳』（略号㉖）である。従って、記載事項も有縁の人々の死が大部分を占める。そのような記録をなぜ公刊するのかとの疑問が出るであろう。

II いわゆる歴史は、英雄や豪傑が世を動かした記録である。ところでそれらの英雄や豪傑の多くは、権力によって大衆を思いのままに動かし、おのれの欲望を達成するに忙しく、その過程で動乱や戦争を地球にはびこらせ、世界はいくたびも破滅しようとした。にもかかわらず世界が破滅を免れたのは、英雄でも豪傑でもない、いわゆる《無名の大衆》の多くが平和を願い、地道な勤勞を怠らなかつたからである。このような無名の大衆こそが実は人間世界の主体であり、このような無名の大衆こそが真正の歴史を形作る主導者であろう。『法華経』では、釈尊が法華経を説かれたのち、未来の世にこの経を宣べ伝えるものは誰か、と問い、その座にいる人たちの予想に反して、まだたれにも知られていない大地のなから湧き出た菩薩群をさして「この人たちがそ未来に法華経を伝える者だ」と宣言される。歴史を形成する主導者が無名の大衆である消息を、そのような形で表現されたもの、と考えることも可能であろう。

妙徳寺の過去帳に記された多くの名は、英雄や豪傑の華美な行動に酔う人々には面白くもおかしくもないであろう。しかし、釈尊が亡くなって二五〇〇年のちに、インドから遠く離れた日本で、釈尊の教えを奉じ、『法華経』を信じて、南無妙法蓮華経、なむみようほうれんげきょう、と唱えつつ、平和をねがって、日々、地道な努力を惜しまなかった人たちである。この人たちの名を記録することこそ、民衆の歴史を顕彰する道ではなからうか。

広布山妙徳寺は、ほとんど無名の僧である成就院日慈上人によって開かれた無名の寺であり、人々の好奇の目を樂します何物もない。けれども、釈尊の教えを慕って『法華経』を信じ、題目を唱える、僧と信者と檀徒が、ここを道場として、三〇〇年のあいだ守り育ててきた。妙徳寺の歴史は、この人たちの信仰と努力によって形作られたものである。年表がほとんどそれらの人たちの名によってうずめられるのは当然ではないか。

一見、単純無味であろうが、しさいに読めば、母と子が同じ日に亡くなったり、祖父が孫を葬ったりしている。そこには残された者の悲しみが沈み、先立つひとの涙がうずもれている。その悲しみや涙を、ありのままに受けとめ、共感同悲しうる人ならば、活字で印刷された『法華経』から釈尊の生ま身の教えを聞き取ることができるであろう。

また『万人講過去帳』に記された「三宝御報恩」「祖師上人御報恩」「六道四生法界万霊」「有縁無縁法界」などの祈禱の言葉を見れば、この時代の人々は、おのれや身に近いものの安全と幸福を願いもしたが、それ



以上に、教えをこうむった積尊や祖師に感謝し、人間のみなならず、直接には見も聞きもしない時間・空間に生命を持つものの安全や幸福を祈ったことが分かり、今の世に生きるわれわれの目をむけるべき方向が示唆され、歴史が、未来を切り開こうとする人たちに指し示す意味をも、ここに読み取ることができているのではないだろうか。

いま妙徳寺を、心の修行の道場、たましいの安らぎ静まる場所とする、わが檀信徒のかたがたならば、みなそのような読みかたをしてくださることと信じたい。

Ⅲ 記述の順は、公元（西暦）を四桁の数字で、次いで（ ）の中に年号と、年を二桁の数字で、さらに干支を、記入する。次いで月日を四桁の数字で記す。四桁の前の二桁は月をあらわし、その前に「閏」をつけたのは閏月であることを示す。後の二桁は日をあらわす。法名の頭に a, b, c などをつけてあるのは、同じ日に死去した人である。

Ⅳ 事項の記述には過去帳の記事をできるだけ尊重した。引用した記事の後には㊸、㊹、㊺の略号をそえて出拠を明らかにした。死去の年・月の不明のものが少なくない。？をつけ、過去帳の記載から判断して割り振ったが、正確とは言い難い。引用以外の記述においては、寺院住職と察せられる人の死は「寂」で示し、その他の場合は法名のみとした。

Ⅴ 過去帳における「聖人」「上人」「大徳」「法師」などの呼称の使用基準が一定しない。ここでは、過去帳の記載を引用するときはその呼称を踏襲し、他の場合は、日蓮聖人にも「聖人」を使用し、他寺の僧は原

則として敬称を省略する。

VI \*印をつけてあるのは法王山大内寺に関連する事項、※印は編者の注であることを示す。「大内寺」は「大圓寺」とすべきかもしれない。その理由は一六二二年の項を見よ。なお、ここでは漢字はおおむね通用の略体を使用した。「大圓寺」を「大円寺」と表記するのはその一例である。

VII 山田日真『日宗龍華年表』（略称「龍華」）、影山堯雄『新編日蓮宗年表』（略称「新表」）、諸種の年表のほか、『京都叢書』などの諸著を参考にした。また木下幹夫氏はじめ多くの方々のお教えを蒙った。感謝する。

VIII 本書の作製にあたり、印刷などの機器・用紙等につき、第一編のとき同様、山本のぶを氏の多大の教導支援をいただいた。また原田禹雄、原田慶、原田道子が、資料収集、印刷、製本などの労に進んであった。

IX 本書はまったくの手作りで、内容・体裁ともに質素なものではあるが、広布山叢書第二編とし、本年九月一三日が第三〇〇年遠忌にあたる妙徳寺開山成就院日慈上人への感謝のしるしとし、八月七日の報恩法要当日、宝前に供え、釈尊はじめ十方の諸仏、日蓮大菩薩等法華経弘通の諸先師大徳に報告し、参詣の檀信徒ならびに有縁の各位に供養として頒布する。

一九九四年 月 日 広布山妙徳寺第二五世 本生院日応 原 田 憲 雄

※右の年表作成のため、『方向』次号の発行は九月以後になる予定です。

「東北」という謡曲がある。「とうぼく」と読みならわしている。もとは「軒端の梅」と言ったそうであるが、和泉式部が上東門院に仕えていた頃、その御所であった東北院の庭に植えたと言えられる梅の木のことである。

話は、東国から都へ来た僧が、東北院に詣でて、ちょうど花ざかりの梅を眺めていると、女人が出てきて語る。「この梅はまだ上東門院がおいでになった頃、女房の和泉式部が植えて、『軒端の梅』と名づけ、四季折々にあきず眺めた梅の木です。あちらの方丈は和泉式部の臥所ですよ、わたしはこの梅の木の主です」と告げて、花の陰にかくれて見えなくなる。

その後、僧が夜もすがら軒端の梅の陰にいて、法華経を読んでいると、和泉式部が現れ「ああらありがたの御経やな。只今誦誦し給うは警諭品よなう……」と話し始める。昔、御堂関白道長が、東北院の門の前を通られたとき、御車の中で御僧と同じように、法華経の警諭品を高らかに読まれたので、わたしは「門の外法の車の音聞けば我も火宅を出でにけるかな」と詠んだことを思い出した。この歌のとおり、わたしは火宅を出たが、歌舞の菩薩となつてなおこの寺に住み人々を教化しているのである、と話し、東北院が晴れて貴い靈地である由来を述べて舞い、「花は根に鳥は古巢に帰るなり、暇申さん」と臥所である方丈の部屋に入って行くと見て、僧の夢が覚めたというのである。夢を見ていたのか、和泉式部の霊が出てきたのかわからないようにしてあるらしい。

この曲の解説を見ると、幽玄な美しさを代表するもので、春の夜の闇にも紛れぬ梅の香をただよわせ、和泉式

部は梅の精のような清浄さを感じさせる姿で表現されている。装束も、僧が読経しているところへ現れてくる後シテは、緋の袴と黄色い長絹ちよんけんというものをつけていて、他の曲の梅の精と同じである。

和泉式部といえは恋多き情熱的な歌人として知られるが、ここに現れる式部は、実在の人とはまるで違っている。そのことについて『謡曲百選』（里井陸郎著）の中に、

和泉式部も亦十指に近い男性との恋の遍歴に身をまかせつつも、官能の歓喜によってはいやし難い空虚を知り、それゆえに心の飢えをみたしてくれる何ものかを渴仰せざるを得なかったのではないだろうか。……和泉式部の内部にひめられた人間的なげきと宗教的な世界との深いつながりを想像し、世阿弥の着想がそこに及んでこの作を書かしたのではないか……

と書かれている。能の鑑賞をするのに、わたしはこの本を読むけれど、能楽堂に行けば、そんなむつかしいことは忘れて、ただ涙を流したり、うっとりしたりしているだけである。能の舞台は一瞬、幻の世界を見せてくれるが、美しい花を見た後のようにため息の出る、何ともはかないものである。

この曲に出てくる「門の外……」という歌は和泉式部の歌集にはないので、そのような伝説があったのか、または作者の虚構であるかだろうとされるが、式部の歌集には、孫の木幡こはたの僧都そうずの家が焼けた時に送った、

出でにける門の外をし知らぬ身は問ふべきほどもさだ過ぎにけり

という歌がある。法華経の譬喩品にある有名な「三車さんしやの譬え」を故事とする。それは次のような話である。

大長者がいて、その家には大勢の子ども達もいたが、家が火事になった。早く外へ出なさいと言っても、遊び

に夢中になっている子ども達は耳をかさない。そこで長者は、門の外に羊の車、鹿の車、牛の車がある。さあここに燃えている家から早く出て行きなさい。おまえ達の欲しいものをやろう、と言った。これを聞いて子ども達は家の外へ走り出たので無事に火の家からのがれることができた。長者はすべての子どもに、とても大きな白い牛がひく立派な車を与えた。羊・鹿・牛の三車は、声聞・縁覚・菩薩の三乗を、大きい白牛の車は一仏乗を譬えるのである。

これをふまえて「火事見舞いが遅れましたがあしからず」という表面的なあいさつと「出家をして仏の道に入ったあなたと違い、わたしは俗生活のなかで愛欲に沈んでいて、火宅を出るべき潮時も失ったまま老人になってしまいました」という深い嘆きとを、あわせてうたっているのである。妙徳寺の日本語の『法華経』では、

三界は安らかでなく、燃えさかる家<sup>いえ</sup>のようだ。もろもろの苦<sup>くる</sup>しみに満ちて、はなはだ恐<sup>おそ</sup>ろしく、生<sup>しょう</sup>、老<sup>らう</sup>、病<sup>びょう</sup>、死<sup>し</sup>の煩<sup>わづら</sup>いは、ここに常に焰<sup>ほのお</sup>だつ火<sup>ひ</sup>と燃えて、いつやむともしれないのだ。仏<sup>ほとけ</sup>のわたしは、燃える家<sup>いえ</sup>のような三界を既に離<sup>はな</sup>れ、野<sup>の</sup>べに林<sup>はやし</sup>に静<sup>しず</sup>かに住<sup>す</sup>んでいる。……

となえる。三界とは、仏教の世界観によって、衆生が生まれ変わり、死に変わって輪廻<sup>りんね</sup>する領域を三つに分けたもの。欲界<sup>よくがい</sup>・色界<sup>しきがい</sup>・無色界<sup>むじきがい</sup>をいう。……と仏教辞典に書いてあるがむつかしい。わたしなどはもちろん、火宅の人だということは自覚しているけれど、和泉式部のように激しい情熱も行動力も持ちあわせていないから、たいいていすることに逃げ腰で、泥田の水を濁さないようにおそるおそる生きていく。そんなだからまた、神仏に対する焼けつくほどの渴仰恋慕もないのだと思う。

もの思へば沢のほたるも我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

などの歌は、和泉式部がただ情熱に浮かされているだけの女でなかったことを十分に知らせてくれる。

現在、和泉式部の寺と呼ばれているのが、新京極の六角さがったところにある誠心院である。式部の法名「誠心院智定專意」にちなんだものと『都名所図会』にある。誠心院では三月二十一日に「和泉式部忌」の法要がいとなまれるようだけれど、この人の生没年は確かにはわからないのだから、彼岸の法要に合わせているのだろうか。与謝野晶子の推定では、長元六年（一〇三三）かその翌七年に六十一、二歳で亡くなっただろうとされている。他の説もあるようだけれど、この説に従うと、そのとき、式部の仕えたあるじ上東門院彰子は四十五歳くらいだった。なお、彰子は八十六歳まで在世と、年表にある。誠心院についての京都市の立てた案内板に、

華嶽山東北寺誠心院と号する真言宗泉涌寺派の寺で、通称和泉式部の名で知られている。寺伝によれば関白藤原道長が、女の上東門院（藤原彰子）に仕えていた和泉式部のために法成寺東北院内の一庵を与えたのが当寺の起こりといわれている。当初、御所の東側にあったのがその後一条小川（上京区）に再建され、さらに天正年間（一五七三—一九一）この地に移された。……

と説明されている。一条小川というのは、堀川的一条戻橋のすぐ近くだけれど、今はふつうの住宅地である。現在の誠心院は、新京極のはでな通りの裏側に、みやげ物店や映画館やアパートの背に囲まれて、狭い境内に、近年建て直されたらしい本堂が、ほとんど余地もないほど、きちんと納まっている。本堂の裏に和泉式部の供養

塔といわれる大きな五輪塔が、よく洗われて、新しいもののようにどっしりと座っている。また本堂の前の軒下には梅の若木が植えられ、立札に、

#### 軒端の梅

霞たつ春きにけりと此花を見るにぞ鳥の声も待たるる

和泉式部

と書いてあった。御本尊は阿弥陀如来、道長と和泉式部の像が祀られているそうである。

それではこの誠心院もその中の一庵であったといわれる東北院はどうなったのだろうか。地図を見ると、東山三十六峰の中の吉田山の東側、真如堂のある紫雲山との谷あいのようなところ、左京区浄土寺真如町にある。

五月十六日、よく晴れてすがすがしい日だった。午後になってから出かけてみた。丸太町通岡崎道でバスを降りて、黒谷さんと呼ばれている金戒光明寺の前を通り、真如堂の山門の前を過ぎてほんの少し行くと寺の門に突き当たった。閉めたままのかなり荒れた感じのものであるが、これは迎称寺、そこから左へ大興寺、極楽寺と並んでいる。いちばん端、吉田山のすぐ下にあるのが東北院だった。白壁の土塀があり、その裾にはあじさいなどの花木が植わっている。それほど高くない門が二つあるが、正面の門はふつうのくぐり門のようで屋根の傾斜もゆるやかに軽快さが感じられる。一方の本堂への門は、寺のものらしく屋根の煉瓦が厚く重い感じがする。しかしどちらの門も扉がなくなっていて開きっぱなしであるからだだ通り抜ける役割しか果たしていない。正面の門の横に、謡曲史跡保存会の立札があり、ここが、謡曲「東北」のゆかりの東北院であること、軒端の梅が植えられていて、根の周囲二メートル、樹高七メートル、地上一・七メートルのところまで三支幹に分かれ、心材はい

ちじるしく腐朽しているが一本だけは元気、白色単弁の花を咲かせ、見事なたくさんの実を結ぶ。と書いてあった。かなり荒れた感じで、人の気配がまったくくない。それでも門を入ったところにガレージ代りにしているのか、八百屋さんのらしい自動車が置いてあった。そっと入ってみると、書院のような作りの建物の前、本堂の東横に、「軒端の梅」という古い立札があって、竹垣に囲まれた木があった。かえてや、いちょうの木が茂って、姿も見えにくい、傍へ寄って見上げると、なるほどたくさんの実をつけている。すぐ横に、梅の若木も植えられている。緑色の毛虫がついて、かすかな音をたてて糞が降っていた。庭はいろいろな木が繁り暗いほどで、草が生える木の葉が散り敷き、人の歩いた跡もない。それでも台所の入り口には郵便受けがあり、電気のメーターが回っていた。中はわからないが、書院風の玄関はそれなりに風格がある。かなり大きな建物である。そのために西側にある本堂が小さく思える。その扉の前に、ガラス瓶が何本か並び、枯れた花がさしてあって、お水を入れるコップや、線香立ての代わりかどうか、植木鉢が一つ置いてある。石燈籠は火袋がなくなって脚に笠だけが乗っているものや、受け台から下だけのものなどもあって、寂しい様子である。中をのぞいてみると、畳の上に、おさいせんが散らばっていた。前の廂を支える二本の柱に板が打ち付けてあって漢字が書いてあるが、下のほうは消えていて読めない。だいたいの意味は、東北院御所の大弁財天女は、桓武天皇の勅により、伝教大師が彫刻して王城の鬼門に祀り、都の太平と国土安全を祈願した。藤原道長がこの弁財天を大変崇敬して、法成寺の鬼門にある東北院に守護神として祀った、というようなことらしい。正確には分からなかった。その弁財天は厨子の扉が閉まっているらしくて、お姿は見えない。前庭の隅にある井戸も石でふたがしてある。何とか保たれてきた史跡も



くずれ去る寸前だなど思いながら外へ出て、裏へまわって行くと、すぐ裏の敷地内と思われる場所に新しい家が建っていた。若いひとが子供を遊ばせていたのでたずねてみると、今は院内に、下宿している人が一人だけいるが住職は住んでいないということだった。本堂は二百年くらい院の方は四百年ほどの古いもので、だいぶ修理をしてきたが、もう最近はずれ入っていないという。裏から見ると、痛みはいっそうはげしくて、あちこち板を打ち付けて閉じてあった。それでも下宿している人があるというのだから住めないこともないのだろう。

細い道を隔ててすぐ吉田山で、そちらへ少し石段を上がると一条天皇と皇子内親王の御陵がある。内親王は一条天皇と上東門院の孫にあたられる。御陵から東北院を見おろすと、屋根は広くなだらかで、くずれそうには見えなかった。

東北院は、藤原道長が造営した法成寺の子院として長元三年（一〇三〇）に上東門院彰子がこの寺の中の東北の隅に建立したものであるという。法成寺は現在は何も残っていないが、府立医大の辺り、加茂川から御所の東寺町まで、北は広小路通、南は荒神口通までの、二百メートル四万くらいの所にあったのだそうである。元弘三年（一一三三）に炎上して廃絶したというが、徒然草の第二十五段には荒れた法成寺の様子が書かれていて、まだ無量寿院が残っていて、丈六の仏が九体尊く並んでおいでになる、と書いている。そうすると兼好はこの法成寺が全焼したのを見ているのかもしれない。東北院が今まで残っているのは、古代学研究者の角田文衛氏の書いておられるところによると、一〇五八年に法成寺が全焼したときに、上東門院は関白頼通の協力をえて、もう少し北へ上がったところ、現在の府立医大の斜め向い側にある本禅寺のあたりに移建した。一一七一年にまた焼亡

したが、すぐ翌年に再建された。それから、歌合が催されたり、飢饉には餓死者の遺骸が運び込まれていっばいになったりいろいろあったが、ともかく莊園が多かったので寺院は無事経営された。その後、南北朝の騒乱で所領を失い衰頹した。それでも室町時代前期には弁財天の人氣が高く、參詣者も多かった。また和泉式部の伝説も語られていたので、世阿弥は、これに取材して謡曲「東北」を創作したのだろう。「応仁の乱」が勃発すると、応仁元年（一四六七）東北院は炎上した。永禄二年（一五五九）に時宗の弥阿弥陀仏が東北院を復興して、宗旨を天台宗から時宗に変えた。天正年間、豊臣秀吉は、東北院に寺領を六石与え、寺院の存続を保証した。その後、元禄五年（一六九二）に寺町に大火があり、東北院も炎上した。このとき罹災した真如堂、迎称寺、大興寺、極楽寺とともに東北院も現在地に移転して今に至るということである。さまざまな歴史をもって、人々に愛されてきた東北院であることに感心する。一条天皇が亡くなられた後、上東門院は六十年余を生きられたが、その中、四十年くらいこの東北院と運命をとともにされたことになる。よほどごまごまと周到な心がまえの努力家だったのだろう。八十六歳は、現代でも短いとは言えない。御子、弟妹方に先立たれる悲しみは想像にあまりある。

この世の極楽に譬えられた法成寺は跡形もなくなり、その子院の東北院も、これまで残ってきたが、復興されることはまずないと思う。その一庵だったと言われる誠心院は、なんとか健在である。形あるものはいつか亡びるとはいうけれど、亡びる寸前を見るのは悲しい。昨日、手を握って別れたお婆さんが、今朝は亡くなったと聞いた。あんなに元気だったのにと、生命のはかなさを目の前に見る。今日を大切にしなければとつくづく思うが、他に方法も考えつかないから、またこういうものを書いていく。

さて、話は、劉孝綽の七弟、つまり兄弟の七番目の劉孝先のことです。その作に次の二首があります。

草堂寺尋無名法師 草堂寺に無名法師を訪ねて

飛鏡点青天 青天にかかった鏡のような月が

横照滿樓前 ひろびろと照って楼前に満ち

深林生夜冷 深い林には夜の冷気が生じ

複閣上宵煙 二層の廊下が夜霧に浮かびあがる

葉動花中露 葉はゆれて花の露をうごかし

湍鳴閨裏泉 瀬は響いて閨の中にわく泉

竹風声若雨 竹に吹く風の声はさながら雨

山虫聽似蟬 山になく虫は聴けば蟬みたいだ

摘果仍荷藉 木の実を摘めばはすの葉が皿

酌水用花伝 水を汲んだら花がひさし

一卮聊自飲 そのいっぱいのみずから飲み

万事且蕭然 さても万事のひっそりしたこと

ひっそりした山房の夜景が、それにふさわしいおちついた筆でえがかれて、いい詩ではありませんか。これを初めて読んだとき、「草堂寺」は、梁都建康の鍾山しゅうざんにあるものであり、「無名法師」は、有名でない坊さん、というほどの普通名詞だろうと思いました。

孝先には別に、「和亡名法師秋夜草堂寺禅房月下」すなわち「亡名法師の《秋夜草堂寺禅房月下》の詩に唱和して」と題する次の詩があるのです。

幽人住北山

あなたはひっそり北の山に住み

月上照山東

月が上のぼって山の東を照らす

洞戸臨松径

洞穴の戸は松の小道にのぞみ

虚窗隱竹叢

明かり窓は竹たかむらのかけ

出林避炎影

林を出れば残暑を避け

歩逕逐涼風

すず風を追って谷ぞいをゆく

平雲断高岫

平らな雲が高い峰を横ぎり

長河隔浄空

天の河は浄らかな空のむこう

数蛩流暗草

いくつか蛩が暗い草むらを流れ

一鳥宿疎桐

鳥ひとつ疎らな桐にとまっている

興逸煙霄上

あこがれはかすむ空のかなたに馳せ

神間宇宙中

たましいは宇宙のうちにしずかだ

還思城闕下

さてまた城下での暮らしを思えば

何異処樊籠

どこが違おう籠むすにすむ鳥と

「炎影」を残暑と訳してみましたがよくわかりません。さて、「亡名」も名がないという意味ですから、無名法師と同じ人が両様に伝わったのかと思うのですが、『古詩紀』一二三には、釈亡名なるひとと無名法師とを別に立て、亡名のは「五苦詩」と題し、生・老・病・死・愛離の苦悩をうたった五首連作と、「五盛陰」と題し、色・受・想・行・識という、存在の五つの構成要素をうたった一首の、あわせて六首で、例えば「生の苦」は、

可患身為患

患むすいといえば身こそ患い

生将憂共生

生命は憂いと共に生じるのだ

心神恒独苦

心もたましいも恒つねにただ苦しみ

寵辱横相驚

寵愛と恥辱がみだりにひとを驚かす

朝光非久照

朝の光はいつまでも照らしはせず

夜燭幾時明

夜よのともし火がいくとき明るかろう

終成一聚土

やがては一塊の土となる身

強覽千年名

なぜあがく千年の名を求めて

こういった一種の形而上詩

無名のは「徐の君の墓を過う」と題する詩。これには次のような故事があります。

春秋時代の呉の賢者の季札は延陵（江蘇武進）に封ぜられたので延陵の季子と呼ばれた。上方の国に使いして徐（安徽泗県）という国を通過したとき、その国君が季子の剣を欲しく思いながら黙っているのを、察した季子は使いを果たした帰途に、わざわざ徐の国を訪ねたが、国君は既に死んでいた。季子は、その墓の木に剣を掛けて立ち去った。従者が「徐の君は亡くなったのに、誰にやるつもりですか」ときくと、季子は「そうじゃない、あのときわたしは剣を上げようときめたのだ。あの人が死んだからといって、自分の気持ちにそむけようか」といった。その故事をもちいた法師の詩。

延陵上国返

延陵の季子は上方からの帰り

枉道訪徐公

わざわざ徐の国の君を訪ねた

死生命忽異

死と生と運命をたちまち異にし

權娛意不同

交歓も思い通りにならなかった

始往邱山北

はじめて北邱の墓やまに行き

聊踐平陵東

平陵の東の義人の跡も歩いた

徒解千金劍

いたずらに千金の剣をはずして

終恨九泉空

亡き人の墓に捧げるうらめしさ

日尽荒郊外

ひとひは尽きる荒れはてた郊外に

煙生松柏中

ゆう霧が湧きあがる松柏のはやし

何言愁寂寞

なんと言おうこのかなしい寂寞

日暮白楊風

日は暮れて白楊に吹きすさぶ風

どれも劉孝先とは関わりなさそうで、そうして孝先が唱和したもとの亡名の《秋夜草堂寺禪房月下》は残っていないのです。『古詩紀』には無名法師の経歴は記載しませんが、亡名法師については簡単に述べています。どうやら『統高僧伝』七にもとづくものらしく、その伝によるとはぼ次のようなことになりました。

俗姓は宗氏、または宋氏で、名はわからず、南郡（湖北）の名家の出だが、若いころ妻子を捨てて山野に放浪し、竹林の七賢のひとりの阮籍に私淑していました。五五二年、梁の元帝が江陵で位につくと、招かれて仕え、命ぜられて作った文章はすべて帝に誉め讃えられたが、かれはつねに恭しく、目立たないよう努めます。五五七年、梁が滅亡すると、出家して蜀（四川）の成都にのがれます。伝には書いてないのですが、このとき名前を捨てて、ひとから聞かれても「忘れられました」とか「名はありません」とかいったので、「名無しさん」と呼ばれるようになったのではないのでしょうか。成都是、梁の武陵王蕭紀が元帝に対して戦いをしかけ敗死した五五三年に西魏に包囲され、まもなく蜀全体が占領下に入りますが、その政策が穏かだったので、武陵王が治めていた時代よりも平和で、土地の人たちも喜ぶ者が多かったようです。亡名は兌禪師なるひとについて修行するのですが、すぐれた人柄や学徳は、包むようになっています。世間でも評判になります。

西魏は、五五六年、恭帝が宇文覺に位を譲って消滅し、宇文氏の周となります。中国では周という朝廷が幾つ

もあるので、歴史家はこの時のを「後周<sup>こうしゅう</sup>」とか「北周<sup>ほくしゅう</sup>」とかいいます。後の一〇世紀にも後周とよばれる朝廷が出るので、ここのは北周と呼んでおきましょう。蜀は、従って北周の治下にはいりますが、亡名が成都に行ったときの長官たちは、ともに亡名を愛敬し、ことに皇族の宇文憲は、五六三年ごろ帰任するとき亡名を都の長安に伴います。ここでも多くの人に尊重され、皇族でもっとも勢力のあった宇文護が、その才能を惜しみ、五六七年わざわざ手紙を送って官吏として仕えるよう勧めます。けれども法師は、懇ろな言葉で断わり、やがて長安を去って、その終りを知らず、ということでした。断わりの手紙が伝に引かれていて、そのときかれが六〇歳だったことがわかります。

無名法師のほうは、さきに記したように経歴が載っていないので、劉孝先の詩に見える無名法師と同じ人かどうか、また亡名法師と同じ人かどうか、厳密に言えばわからないわけですが、わたしにはいずれも同じ人だろうという気がします。しかし、そうだとしてもいろいろ問題があります。

「徐の君の墓を過う」の「徐の君」が、あの季子の話にでてくる徐の君なのか、無名法師の知人の徐という人を季子の話の徐の君になぞらえているだけなのか、もうひとつよく分らないからです。ここでは、季子のほうのを徐の君、法師の知人の場合を徐君ということにします。法師の訪ねたのが徐の君の墓だとすれば、それは今の安徽泗県にちかい処でなければならず、徐君であれば、外の場所であっていいわけです。詩には「邙山」と「平陵」という地名が出てきます。これも普通名詞と見られないことはありませんが、一般には河南洛陽にあるのが有名です。そのどちらか、ということでは、この詩の解釈も変わってきます。それについては次回。